



中国がわかるシリーズ 43 人類初のグローバルゼーション

ライフネット生命保険株式会社
創業者 出口治明氏

クビライは、聡明で構想力豊かな稀有なリーダーでした。人類史上、最高の政治家の1人と言っても決して間違いではないでしょう。クビライは、戦争、国家、社会、経済をすべてシステム化したのです。ダレイオス大王は、王の道を整備し、関所を取り払って、陸路によって1つに結ばれたユーラシアを構想しました。クビライは、それに、海路(泉州～ホルムズが大幹線)を付け加え、インド洋からアフリカに至るまで、縦横無尽に、世界を結び付けようと構想しました。海の道は、陸の道よりも遥かに多くのものを運ぶことができます。

要するに、クビライは、草原の軍事力と江南の経済力とムスリムの商業力を、合体させようとしたのです。クビライによって、中国の版図は、これまでよりひとまわり大きくなりました。クビライ以降の中国は、東北地方、モンゴル、中央アジア、チベット、雲南などを領域内に抱え、東ユーラシア全体をその活動の舞台とするようになります。いわば、中国史のステージがワンランクアップしたのです。

クビライ政権は、土地税ではなく専売(塩。「塩引」と呼ばれた塩の引換券＝有価証券を政府が大商人に販売)と商業税に依拠した政権でした(80%が塩税、10～15%が商業税という試算もなされています)。世界初の重商主義国家といってもいいでしょう。大元ウルスは、イラーン系のムスリム商人やウイグル商人が運営する銀を価値の基準とする経済システムによって支えられていました。銀で徴収された商業税(30分の1)は、クビライの下に集められ、ユーラシア各地の王族や支配層に贈与されました。その銀は、ユーラシア各地のムスリムの大商社(オルトク。いわば、特許会社であり、現代の国際的な投資銀行や株式会社の1つの祖形とも考えられます)に投資され、中国から絹や陶磁器を購入する資金に充当されました。こうして中国に還流した銀は、商業税の形で、再び、政府に吸い上げられたのです。

中国はそれまでの自立したシステムから、ユーラシアの銀の大循環システムの中に組み込まれたのです。各地の通過税は撤廃された。いわば、ユーラシア全体を巻き込んだ楽市・楽座政策が



長期投資仲間通信「インベストライフ」

とられたのです。モンゴルの王族は、巨大な資本家となりました。モンゴル帝国は、銀とオルトクを通じたユーラシア大の経済・金融組織と化したのです。グローバリゼーションは、ここにほぼ完全な実現を見ました。

そして、銀と紙幣の流通によって、行き場を失った銅銭は、日本などに大量に輸出されたのです。これが日本に貨幣経済をもたらしました。なお、モンゴルは、バーリシュ(ペルシア語で枕の意味)と呼ばれた2キログラムの銀塊(インゴット)を錠とし、その下に、両(40グラム)と銭(4グラム)のコインを置いて、基軸通貨としました。ただし、経済規模に比べて、銀の絶対量が不足していたので(まだ、アメリカ大陸や日本の銀は登場していません。雲南が銀の主生産地でした)、高額紙幣として、塩引が流通しました。

こうして、クビライの下で、ユーラシア循環交通路が完成し、世界の交易は飛躍的な高まりを見せました。アフマドのようなオルトク出身の財務長官が縦横無尽に活躍したのです(ウォール街の出身者が財務長官になる現在のアメリカ合衆国のようです)。綿布生産の先端技術が、インドから、長江下流域デルタに伝えられたのも、この時代です。当時のモンゴルは、既にアフリカが海に囲まれた大陸であることを認識していました(ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰到達より、約250年も早い)。人、物、金、情報が自由に往来するグローバリゼーションの時代が実現したのです。